◎ヨーロッパの現代伝説◎

# ジャンボジェットのネズミ

Rolf Wilhelm Brednich: DIE MAUS IM JUMBO-JET

ロルフ・ヴィルヘルム・ブレードニヒ〈編〉

池田香代子＋鈴木仁子〈訳〉

◎ヨーロッパの現代伝説◎Rolf Wilhelm Brednich: DIE MAUS IM JUMBO-JET

# ジャンボジェットのネズミ

ロルフ・ヴィルヘルム・ブレードニヒ〔編〕 池田香代子 鈴木仁子〔訳〕

訳者略歴
池田香代子
一九四八年生
東京都立大学卒
口承文芸学専攻
翻訳家
主要訳書
「グリム童話集」全四巻
アルニム／ブレンターノ「少年の魔法の角笛」（共訳）
ブレードニヒ「悪魔のほくろ　ヨーロッパの現代伝説」（共訳）
エリス「一つよけいなおとぎ話　グリム神話の解体」（共訳）
鈴木仁子
一九五六年生
名古屋大学大学院博士課程前期中退
ドイツ現代文学専攻

ジャンボジェットのネズミ　ヨーロッパの現代伝説

一九九三年一一月五日印刷
一九九三年一一月二〇日発行

訳者　池田香代子　鈴木仁子
©

発行者　藤原一晃

印刷所　東洋経済印刷株式会社

発行所　株式会社　白水社
東京都千代田区神田小川町三の二四
営業部〇三（三二九一）七八一一
編集部〇三（三二九一）七八二一
振替東京　九一二三二二八
郵便番号一〇一

黒岩製本

ISBN 4-560-04034-6

Printed in Japan

R 〈日本複写権センター委託出版物〉
本書の全部または一部を無断で複写複製（コピー）することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター（03-3269-5784）にご連絡ください。

# ジャンボジェットのネズミ　ヨーロッパの現代伝説

© C. H. Beck'sche Verlagsbuchhandlung, München 1991
by arrangement with C. H. Beck Verlag, München
through ORION LITERARY AGENCY, TOKYO

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.co

# 『ジャンボジェットのネズミ◉ヨーロッパの現代伝説』目次


## Ⅰ 東ドイツ 7

① 歓迎金 9
② 自分とこのリンゴでも食ってろ！ 10
③ 四十年も贅沢ざんまい 12
④ トロピカル・フルーツ 14
⑤ 名調子、お涙ちょうだい 14
⑥ ビデオデッキじゃなかった！ 16
⑦ お得なまとめ買い 18
⑧ 東ドイツはライヴァル 20
⑨ マイセンの陶器 21
⑩ 東ドイツの労働倫理 22
⑪ トラビとヴァルトブルクのレース 24

## Ⅱ 自動車と交通 27

⑫ ジャンボジェットのネズミ 29
⑬ 開かずのコックピット 30
⑭ 飛行機初体験 32
⑮ 降ってくる氷 33
⑯ 消えたヒッチハイカー 34
⑰ 人間、金がなきゃ 36
⑱ フォルクスワーゲンにエンコした象 38
⑲ サイドミラー 40
⑳ 車体破損 41
㉑ 新婚さんの車 42
㉒ シートの問題 43

㉓フラッシュ三回 44
㉔スコットランドの霧 45
㉕災難 46
㉖ブレーキ検査 47
㉗自転車乗りの復讐 48

Ⅲ 日常生活奇談 51

㉘魔法の電球 53
㉙忘れ物はシャーマン戦車 54
㉚身から出た錆 55
㉛引力 57
㉜人喰い機械 58
㉝転轍機に挟まった足 59
㉞粗大ゴミ 60
㉟復讐は電話で 61
㊱コンピュータマニア 62
㊲仕返し 62
㊳自殺 63
㊴物理の試験 64
㊵個人保険の患者 65
㊶どうしてもとれない 67
㊷煙草は長生きのもと 68
㊸泥棒侵入！ 69
㊹泥棒だってなめまっせ 69
㊺誤射 71
㊻点検 73

Ⅳ バカンスと異郷 75

㊼消えたホテルルーム 77
㊽カジノのスキャンダル 78
㊾凍ったパラグライダー 79
㊿ピサの斜塔 80
(51)幽霊船 82
(52)本場のキャメル・レザー 83
(53)判決はリンチ 84
(54)スペインの野蛮な習慣 85
(55)シャンテリア 86
(56)車に轢かれたカンガルー 87
(57)臓器泥棒 89
(58)降りた女 91

⑤⑨ライオネル・リッチー・ストーリー 93

## Ⅴ セックス 95

⑥⑩ビル 97
⑥⑪凍りついた給油口 98
⑥⑫誕生日のパブニング 99
⑥⑬人違い 100
⑥⑭ハロウィーンパーティ 101
⑥⑮お返しに 103
⑥⑥全身入れ墨 105
⑥⑦キルケニーの未亡人 107
⑥⑧セックスビデオ 108
⑥⑨覗き 109
⑦⓪バットマン 110
⑦①危険な情事 112
⑦②オナニーの顛末 112

## Ⅵ 飲食 115

⑦③喉に詰まったチキンの骨 117
⑦④ポーランド人のグラーシュ 118
⑦⑤犬を連れた夫婦 120
⑦⑥最後のブツ 121
⑦⑦フィンガーボウル 124
⑦⑧甘い死 125
⑦⑨マイスターヴルツ 126
⑧⓪クラウスターラー 127

## Ⅶ 動物 129

⑧①死んだブルーノはどこへ行った 131
⑧②二重の損失 132
⑧③航空貨物の猫 133
⑧④壁紙を食べる鳥たち 134
⑧⑤ガチョウ愛護 136

## Ⅷ 思いがけない死 139

⑧⑥盗まれたお姑さん 141
⑧⑦誰も彼をいらない 142
⑧⑧偽装事故 143
⑧⑨死亡年月日 144
⑨⓪有毒ウェディングドレス 146

⑨1 ナイフ入りの毛皮のコート 147
⑨2 麻薬ベビー 148
⑨3 遺産相続人 153
⑨4 堅信礼の晴れ着 154
⑨5 イタリアの靴 156
⑨6 消える試着室 158
⑨7 ジッパーに挟まったテーブルクロス 160
⑨8 歯がない 161
⑨9 一難去ってまた二難 163
⑩0 軽すぎるお産 164
⑩1 へそ栽培 165
⑩2 ハンドバッグ 167
⑩3 老婦人のトランク 168

Ⅸ 奇妙な偶然 151

解説 171
あとがき 183
参考文献 i

◉装幀……伊勢功治

# I 東ドイツ〔第1話〜11話〕

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.co

## ①歓迎金

これね、東ドイツの人が西ドイツに来ると、まだ歓迎金がもらえた頃の話よ。ゲッティンゲンの若い女の人が、ベビーカーに一歳半くらいの赤ちゃんを乗せてたんだけど、おおいそぎで買物するつもりで、スーパーの前に「駐車」しておいたの。戻ってみると、ベビーカーは空っぽ。その人、パニックになってそのへんを捜しまわったり、通りがかりの人に聞いたり、しまいには警察にも言いに行った。でもなにをしてもムダ。子供の手がかりはひとつも出てこない。それが、しばらくしたらベビーカーにその子がひょっこり戻ってるじゃない。で、分かったのよ。東ドイツから来た夫婦者が、家におなじくらいの歳の子がいるもんだから、赤ちゃんを「ちょっと拝借」したの。そして市役所へ行って自分の子供のパスポートを見せて、その子をダミーにして歓迎金を子供の分までせしめたってわけ。夫婦は騒ぎを引き起こしたおわびに、子供の母親に花束をプレゼントしたの。

⚜

出所――ゲッティンゲンの二十六歳の主婦。彼女の友人女性の知り合いの女性によれば、この事件は一九九〇年一月に起こったという。ゲッティンゲン警察は、このような事件の報告は一件も受けていない。芸術史専攻の女子学生が採録してくれた類話では、若い夫婦が祖母に赤ちゃんを見ていてくれるよう頼んで、アルディへ買物に行く。祖母がうっかりしていたために、赤ちゃんはベビーカーから盗まれる。この話の「核になった事実」は、歓迎金の受け取りにたびたびごまかしがあったとされる報道だ。

◎歓迎金とは、一九九〇年三月ごろまで、連邦政府が東から西を訪れる市民に西のパスポートとともに一人当たり百マルクを支給したもの。正式には「移住者にたいする連邦緊急受け入れ措置」といって、再統一とはかかわりなく、かなり以前からあった。百マルクは日本円で六～七千円だから、スーパーで食料品を買うのにちょうどよい額だった。アルディは全国チェーンのスーパー。最近は郊外型の大型店も出しているが、規模の小さい古い店も多く、値段も割高。

## ②自分とこのリンゴでも食ってろ！

西ベルリンのドライバーが、東ドイツを通るアウトバーンのトランジット区間を走ってて、ヴィルスドゥルッフのパーキングエリアでガソリンを入れることになったんです。男は順番待ちの行列に車を止めて、トランクの蓋を開けておきました。予備のタンクにも給油してもらおうと思ったんです。後ろにトラビが待っていました。そこから小さな女の子が降りてきて、開いていたトランクルームを覗いて、目を丸くしました。バナナの箱がいくつも積んであったのです。女の子は父親に、見てきたことを報告しました。「パパ、前のおじさん、トランクいっぱい、バナナを積んでるよ！」「行って、ひとつちょうだいって、頼んでごらん。きっとくれるよ！」ところが、西ベルリンの男はけんもほろろに、子供をどなりつけたんです。「てめえらは自分とこのリンゴでも食ってろ！」って。これを知ったガソリンスタンドの店長は、横柄な西ベルリン男に頭にきて、給油を拒否したんですね。男は「そんなら次のガソリ

ンスタンドに行く」と、捨てゼリフを吐いて走って行きました。でも、店長がどう出るかまでは見通せなかった。店長はすぐに電話をとると、これは順番待ちのみんなが聞いてたんですが、アウトバーンの次のガソリンスタンドにいきさつを話し、ベルリンナンバーのこれこれの車には一滴もガソリンを売らないでほしい、隣のガソリンスタンドにもそう伝えてくれ、と頼んだんです。

一九九〇年五月十三日、ヘッセン・ラジオが『悪魔のほくろ』を番組（HR3の『トーク・アバウト』）で取りあげたことから、東ドイツ・ハレ在住のブルクハルト・イルミッシュが投書してきたもの。これは「復讐話」という、人気のタイプの現代の語りである。ここでは子供に横柄な態度をとった「ヴェッシー」にたいし、東ドイツの住民が、彼らならではの連帯を発揮して仕返しをする。

バナナは西側の消費水準を代表するものとして、ほかのさまざまな現代の語りにも登場し、東ドイツの住民が買い求めたがる品物であるとされる（第4話を参照のこと）。西ベルリンでは壁が解放されてから次のようなジョークがはやった。「東へ行くときの最新式のコンパスを知ってる？　壁の上にバナナを一本おいて、くるくる回すんだ。翌朝、先のかじってあったほうが東さ」

◎ドイツが東西に別れていたあいだ、西ベルリンは東ドイツの中の「陸の孤島」だった。西ドイツから西ベルリンまでのアウトバーンは数本が通じていたが、東の領土を通過するそのトランジット区間には、出口も入口もない。人が容易にアウトバーンやパーキングエリアから出入りすることもできない構造になっていた。西の車はひたすら走るのみ。両側の畑などにはところどころ監視塔があり、兵士の姿が不気味だった。トラビの正式名称はトラバント、旧東ドイ

ツの国産大衆車。男の子が生まれたら購入予約をすると言われるほど、手に入りにくかった。もちろん大衆の収入にくらべてひじょうに高価なのに、ベコベコのボディ、NOxをたっぷりふくんだ黒煙をもうもうと排気しながら走る。HR3はヘッシッシェス・ルンドフンク3、ヘッセン第三ラジオのこと。『トーク・アバウト』は、文化的な話題を取り上げる、まじめなトーク番組。『悪魔のほくろ』は、本書の編著者による、ドイツの現代伝説アンソロジー第一集（邦訳一九九二年、白水社）。壁解放の直後まで、東ドイツの市民は「ツォーニー」と呼ばれていた。西ドイツでソ連占領地区を意味していた「ツォーネ」から派生したのだろう。いまは、旧東の市民は「オッシー」、旧西は「ヴェッシー」という。それぞれ、東と西を意味するオストとヴェストから来ている。

## ③四十年も贅沢さんまい

ヴィルヘルムスハーフェンのシュール通りに住む夫婦が一九八八年、ハンガリーのバラトン湖での休暇中、自分たちより年下の感じのいい東ドイツの夫婦と知り合った。「ぜひ家に遊びにいらっしゃい」とヴィルヘルムスハーフェンの夫婦は言った。ふたりの「ツォーニー」が、招待どおりのこのこやってくる気遣いはまずない。その頃は、いまほどそう簡単には西へ旅行できなかったから。

一九九〇年二月、なんの予告もなく玄関に招待客があらわれた。ヴィルヘルムスハーフェンの夫婦は、翌々日からテネリファへ休暇旅行に発つところだったので、招かれざる客もいいところ。それでも、一晩ならと、休暇先で知り合った夫婦を歓待した。翌朝、東ドイツの夫婦が申し出た。休暇にいらっしゃってるあいだ、わたしたちが留守番していましょう、西は押し込みがしょっちゅうありますからね。主人側は、なんていい人たちなんだろう、と思った。

ところが十四日後に戻ってみると、家の中はほとんどすっからかん。テレビもない、ビデオもない、電子レンジも骨董品も絨毯も装身具もない。おまけに奥さんのセカンドカー、ゴルフGTIまで。テーブルにメモがあった。「あなたたちは四十年も贅沢ざんまいしてきました。ここに、わたしたちの取り分をいただいて行きます」

出所――一九九〇年四月十四日付『ヴィルヘルムスハーフェン新聞』。ゴルヒ・フォック記念館（ハウス）の棟上げ式でこの話を聞いてきた記者の語りにもとづく。もっともこの記事を書いたバルバラ・シュヴァルツは、この話をけっして真に受けているわけではなく、次のような見出しをつけた、「ホントにほんとの話？　ツォーニーは警戒されている　『悪魔のほくろ』から復活祭のご挨拶」。これより以前、わたしはオストフリースラントの類話にすでにふたつお目にかかっていた。最近、この手の話は枚挙にいとまがないほどだ。「道具だて」はいつもおなじ。もてなす主人と客がおり、物が消え、「四十年」を引き合いにした書き置きがあって、盗みが正当化される。ただ、知り合った状況と町の名前が入れ替わるだけだ。なくなった品物の数量はさまざまだが、ステイタスシンボルとなるような一品にかぎられることもあり、とくにビデオデッキが好まれる。たとえばマイン河畔ホッホハイムの類話は、東ドイツのある都市と姉妹都市になった縁で、東の夫婦が豪華な調度品をそろえた邸宅に泊めてもらう。夫婦は欲しかったビデオデッキを埋め合せのためと称してもらって行く。メモにはこう記されている。「おたくたちはまた新しいのが買えるでしょう！」

東ドイツからの訪問者にまつわるこれらの話は、すべて不安を下敷きにしている。壁解放と、輪郭をとりつつある再統一を前にした西ドイツ市民の動揺を表わしていると解釈できるだろう。

◎テネリファは大西洋のカナリア諸島の島。そんなところにまでバカンスに出かけるなんて、西の市民はいいご身分、という、優越感とも東の夫婦者の肩をもつ気持ともつかないものが、この地名から発せられている。ゴルヒ・フォック（一八八〇～一九七〇）は、元旧西ドイツ海軍軍人の経歴をもつ海洋小説家。

## ④トロピカル・フルーツ

東ドイツから来た女性の買い物客が、西ドイツ（ヴィルヘルムスハーフェン、ゲッティンゲン、あるいは国境近くの他のさまざまな場所）のスーパーで特売のバナナを買おうとしたが、もう一本も残っていなかった。彼女はレジの行列の自分の前にいた女性客のショッピングカートに手を突っ込んで、お目当ての品を取り出すと、こう言った。「あなたたちは四十年もずっと買えたじゃない、今度はあたしたちの番よ！」

出所――一九九〇年四月十四日付の、ヴィルヘルムスハーフェンの地元紙のほか、数多くの聞き書き。

## ⑤名調子、お涙ちょうだい

東ドイツ市民の中には、「四十年、待たされ苦しんだんだ。こんどは自分たちの番だ」と屁理屈をこ



试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.co